

資源生物研究開発へ連携

平田機工と崇城大が協定

未知の成分や効能が新薬づくりに役立つなどと期待される「資源生物」の研究開発に向け、自動車や半導体などの生産設備を手がける平田機工（熊本市）は崇城大（同）と相互支援の連携協定を結んだ。平田雄一

郎社長と小野長門学長が9日、熊本市内で記者会見し、成果の社会還元や人材育成を表明した。

格的に研究開発に乗りだし、最先端の分析機器を備えたラボ（研究施設）も社内にも構えた。

資源生物は、機能性食品や医薬品などに利用できる植物や微生物など。同社は昨年から新規事業として本

野生種の有用な「遺伝資源」の利用については生物多様性条約などに従い、インドネシアとアルゼンチン

連携協定書を手にする平田雄一郎社長（左）と小野長門学長。9日午前、熊本市



と契約。植物を日本国内に持ち込んで分析、研究でき

る体制を整えたという。今後、他社にも研究素材や材料を提供していく計画だ。

一方、大学には生物生命学科や薬学科があり、医薬品の開発データのほか、遺伝資源に関する分析などで協力する。人材育成でもインターンシップなどで互いに力を合わせる方針だ。

両者は産学連携で半導体関連の共同研究に取り組んできた。今回の協定は11月1日に締結した。

記者会見で平田社長は「さまざまな分野の需要に対応するため、研究開発を推進している。優秀な人材育成にも期待したい」、小野学長は「知的資源の社会還元に尽力したい」と述べた。

（藤崎真一）